歴史と地形から、愛知を知る。ブラアイチ

SPOT スポット 7

現在に残る田中吉政（たなかよしまさ）の偉業 ～岡崎城の近世城郭化～

田中吉政（たなかよしまさ）と岡崎のまちづくり

田中吉政（たなかよしまさ）は、豊臣家臣として各地の戦いで功績を挙げた武将で、石垣や城郭整備に長けた人物として知られています。

徳川家康の関東移封後（1590年）、豊臣秀吉の大名配置替えにより岡崎城主となり、石垣や天守の整備など岡崎城の近世城郭化を進めました。また、城下町の拡張や東海道整備、矢作川の築堤にも取り組み、岡崎の町の基盤づくりを大きく推し進めました。

その後、1600年に関ヶ原の戦いで石田三成を捕縛した戦功により、筑後国（ちくご）（現福岡県南部）に加増のうえ移封されました。

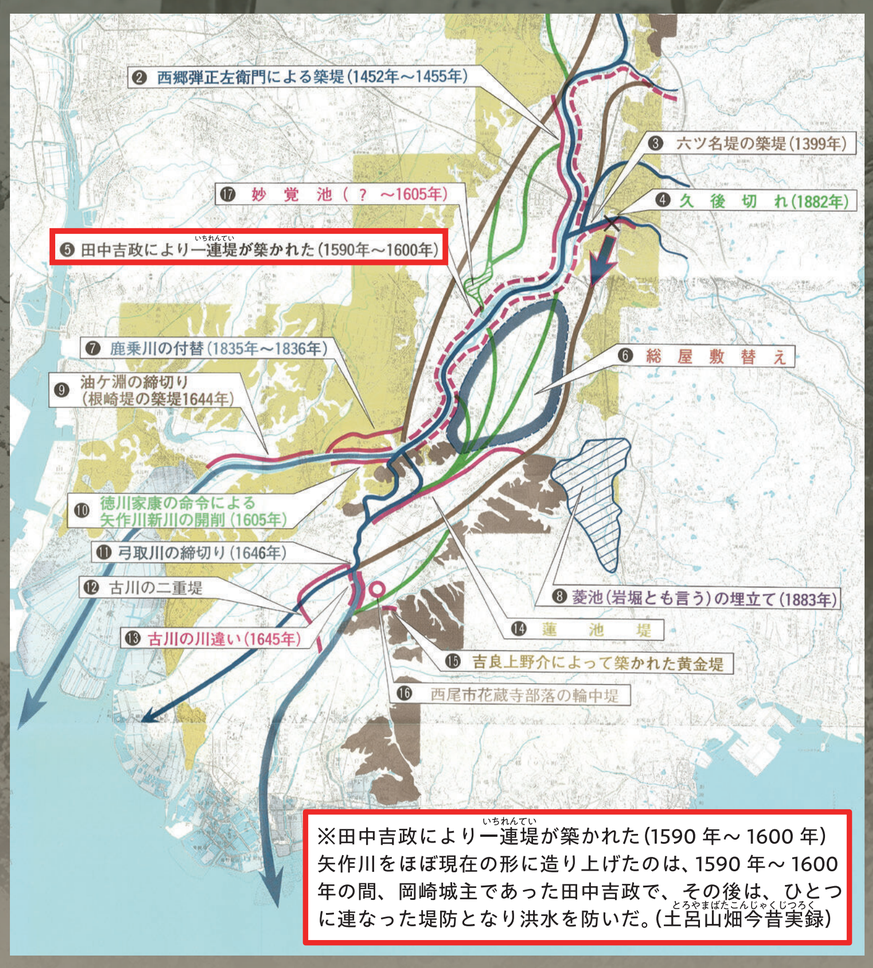


図１　矢作川治水の歴史に一部加筆　矢作川流域治水対策連絡会 提供

二十七曲り（にじゅうななまが）

岡崎城主となった田中吉政（たなかよしまさ）は、城下町を拡張・整備（みょう）しました。また、それまで乙川の左岸の明大寺（だいじ）を通っていたと考えられる東海道を城下へ引き込みました。この道は、幾度も折れ曲がる構造から二十七曲り（にじゅうななまが）と呼ばれるようになります。この構造は道の距離を延ばし、街道沿いに多くの商家や宿などを並べる工夫と考えられ、城下町は経済の拠点として発展しました。

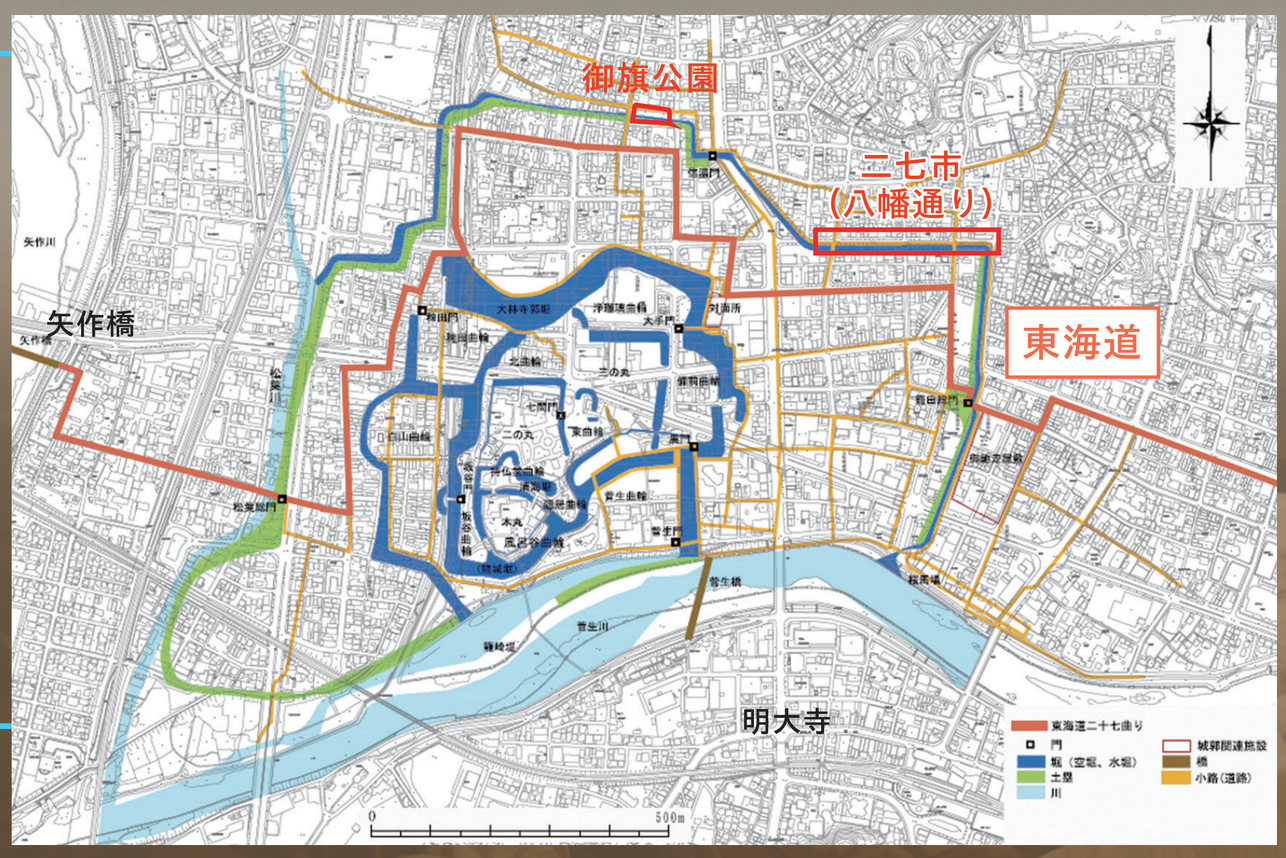


図２　岡崎城郭図（岡崎城跡範囲と二十七曲り）



総堀北端部分アップ



図３　岡崎城図（19世紀初頭）岡崎市美術博物館蔵

田中堀

田中吉政（たなかよしまさ）が構築したことから「田中堀」とも呼ばれる総堀（そうぼり）※1は、城下町の外周に築かれた大規模な堀で、総構え（そうがま）※2の構造を形成していました。

総堀（そうぼり）は、東西約1.5㎞、南北約1㎞、総延長約4.7㎞にも及びました。また、堀には土塁（どるい）※3が築かれ、城郭の最外郭として防御を強化すると共に、城下町の範囲を示す役割も担っていたものと考えられます。

現在、公園内にある吉政（よしまさ）像は、実は元々違う場所にありました。以前は東海道が通っていたと考えられる籠田（かごだ）公園の南側（中央緑道）にありましたが、2020年に行われた中央緑道の工事に伴い、田中堀の北端付近に位置する、御旗（みはた）公園に移設されました。移設後も公園の中から岡崎の城下町を見守ってくれています。

※1　総構えを構成する堀のこと。惣堀ともいう。
※2　城下町一帯の外周を堀や石垣・土塁で囲い込んだ城郭構造のこと。総曲輪、惣構ともいう。
※3　土を盛って築いた防御施設のこと。外敵の侵入を防ぐ役割を持つ。

※所蔵元の記載がない図は岡崎市教育委員会蔵

ココに注目！

歴史と地形から、愛知を知る。ブラアイチ

発見！御旗公園の発掘調査でみえた！岡崎城の総堀

ちょっと

平成30年度岡崎城跡総堀跡発掘調査

平成30年度に御旗公園内で発掘調査が実施されました。

19世紀初頭の岡崎城の絵図と、現代の地図を重ねてみると、御旗公園の北側2/3が総堀に該当していることがわかります。この想定のもと、総堀の堀肩※1や土塁の有無を確認するための調査区（トレンチ1）と、総堀の堀底の確認をするための調査区（トレンチ２）が調査されました。



図１　岡崎城図と都市計画図の重ね図

御旗公園部分アップ

発掘調査では、次のことが確認されました。

①トレンチ１では、土塁状の堆積と北側へ下がる堀の斜面が確認されました。（図２・３）

②トレンチ２では、トレンチ１で見つかった堀の斜面が、さらに北へ下がることが確認されました。また堀底に至らず、トレンチ２よりも深いことから、堀は少なくとも約2.4m以上の深さがあったと考えられます。（図３）

③堀の内側に溜まった土がすべて戦災層※2だったことから、戦後まで堀状の窪みが残っていたと考えられます。（図３）

④溝１の上層からは鉄滓※3が出土しました。周辺に鍛冶に関連する施設があった可能性が考えられます。

⑤図４の地形図からわかるように、総堀は、北東の甲山と西茶臼山（仮称）の間から伊賀川へ伸びる谷に沿った形になっています。このことから、自然地形を活かして総堀が築かれたことが読み取れます。



図２　トレンチ１東壁断面

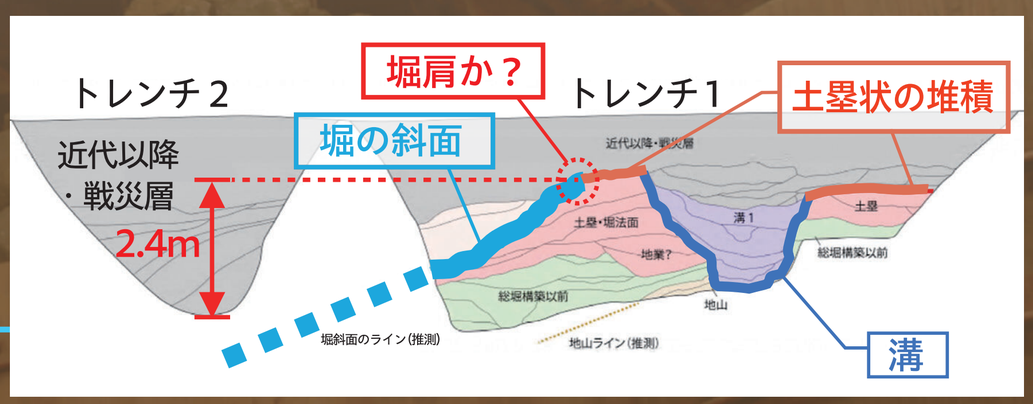


図３　トレンチ１・２東壁断面図（S=1/100）

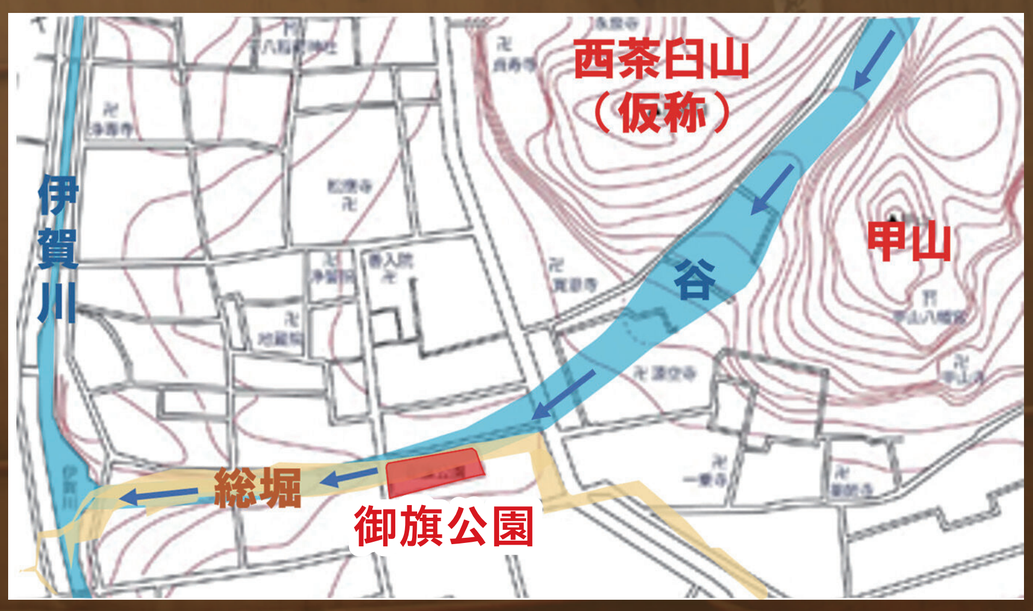


図４　昭和初期の地形図と総堀図

※1　堀の落ちはじめのこと。

※2　空襲や火災でできた焼土や灰などが放り込まれてできた層。

※3　鉄鉱石から鉄を作る際に出る、鉄以外の不純物が溶け出して冷え固まったもの。



図５　現地説明会（平成31年１月開催、参加者約350名）

※所蔵元の記載がない図は岡崎市教育委員会蔵